

## キリストの力を届ける“手紙”

IIコリント 12・9-10,13・3b-4 (要旨)

説教者 原田憲夫



本日は「キリストの手紙」シリーズの最終回です。「鍵の語キ-ワード」は「力」です。「キリストの力」はだれに与えられるのか、みことばに耳を傾けましょう。

## 序

今日私たちが読んでいる「古い手紙」は、「一人の人間パウロ」の生の声が聞こえる手紙です。つまり、現代の私たちが抱えるのと同じ「弱さ」を抱える一人の人間の手紙です。

しかしそのパウロが、私たち-教会は「キリストの力を届けるキリストの手紙」だとはっきり語るのです。その秘密に触れたいと思います。

## 【1】教会の悲しい現実-弱さを引き受ける(12・20)

使徒パウロは、当時、地中海で最も栄えた大都市の一つコリントで約一年半滞在し伝道をし(使徒 18・11)。その結果、多くのコリントの人々がキリストを信じ、教会が生まれました(同 18・8)。

けれども、その中からパウロを蔑むような言葉を浴びせる人が出たのです。→10・10。パウロはそういう声に「限度を超えて自分を誇ることはしない」(10・11-16)と応えます。そして本気で彼らを心配します。本来、「からだ」の各器官は互いに各々の欠け・弱い部分を補い合うものなのに、その欠けや弱い部分をそれぞれが攻め始めるので、「からだ」は衰弱し、壊れていきかねない、と。→12・20。

▶しかし同時に、使徒パウロはこのコリントの教会の悲しい現実、自分を誇る過ち、謂わばコリントの人々が抱える「弱さ」を彼自身の「弱さ」として引き受け、宣言するのです(11・29-30)。これこそ彼の真骨頂です、そして私たちへのチャレンジです！

## 【2】自分の弱さを誇る (12・5,9)

使徒パウロは、14年前に経験した霊的体験について語ります。それは「誇ることができる-特別な霊的体験」でした。しかし、この体験のゆえに高慢にならないようにと、「肉体に一つのとげ」が与えられたと証しします(7)。忍耐強い彼がこの「とげ」を去らせてほしいと三度主に願った(8)と言うように、それがどれほどの苦しみ/痛みであったか…。

しかし主は、この祈りを聞き入れず、「とげ」を残されたのです。

▶使徒パウロは、祈りが聞かれないことを通して神の御心を悟り、喜んで自分の弱さ-弱いときにこそ強い-を受け入れたのです(12・9-10)。

「弱さ」ではなく「弱さの中にある彼をおおうキリストの力」を学んだのです。つまり、「弱さの中に宿るキリストの力」です！

そこからコリントの人たちに熱く「キリスト」を語ります。→13・3b。さらにどうしても伝えなかったメッセージが続きます。→13・4-5。

「キリストの力」は、人の目には十字架の弱さとして映ります。しかし、死を打ち破り復活された真の強さです。

5a あなたがたは、信仰に生きているかどうか、自分自身を試し、吟味しなさい。

▶「弱さを知る/受け入れる」、これが今日の私たち-あなたに、教会に問われている点ではないでしょうか？(参照)『聖サビエル書簡抄』

今日、私たちも「自分の弱さを誇ります」「自分の欠け、失敗を隠しません」と、主のご聖霊による助けと導きの中で決意することができますように…。

## 【3】互いに「同労者」(協力者)として主に呼ばれている「キリストの手紙」(12・18, cf.8・23)

使徒パウロは宣教・伝道、教会形成を決して一人でしていたわけではありません。使い走りのように見えるテモテもテトスもパウロの「兄弟」として、また「同じ心で歩んだ同労者(協力者)」として、同じ役目を担っていたのです(8・23,12・18)。

▶使徒パウロにとって同労者(協力者)は、「キリストの力の現れ」にほかなりませんでした。そして、今日の私たちもまた互いに「同労者」(協力者)として主に呼ばれ、それぞれの処に届けられている「キリストの手紙」なのです！

## 【結び】

IIコリント 3・18！今日の私たちが追い求めるべき「キリストの手紙」の真の姿です！

e.g.待合室の人々の話；

油断してはなりません！

信仰者は、主を信頼し行動する人です。物事の存在を信じているだけでなく、自分が信じているお方に人生を預けて生きる人です。

▷この地に遣わされた私たち-あなたを通して、それぞれの地に建てられた主の教会を通して、主の栄光が映し出されていきますように！

(祈り)

(「キリストの手紙」シリーズ 11)